

開成が鳴らした「高大接続システム改革」に向けた号砲 ～開成中学の国語入試で新傾向問題が颯爽と登場～

平成 30 年 2 月 4 日

NPO 法人ロジケーション・ジャパン理事長

株式会社ジーワンラーニング代表取締役

神尾雄一郎

私立中学最難関校の一翼を担う開成が、ついに動いた。

人口減少社会やグローバル化、AI の進化に伴う社会構造の変化に対応した人材の育成が求められている昨今。2016 年 3 月に文部科学省が公表した「高大接続システム改革会議『最終報告』」の中でも、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入に向けて「内容に関する十分な知識と本質的な理解を基に問題を主体的に発見・定義し、様々な情報を統合し構造化しながら問題解決に向けて主体的に思考・判断し、そのプロセスや結果について主体的に表現したり実行したりするために必要な諸能力をいかに適切に評価するかを重視する」とされているが（注 1）、2018 年 2 月 1 日に実施された開成中学校の国語の入試問題は、まさにこうした意向と軌を一にするものであった。

開成中学校の国語の入試問題[□]は、架空の企業が規模の異なる支店の百貨店で弁当を販売した実績のグラフを元に、その業績について発注した 500 個の弁当を全て売り切った社員を評価する販売部長に対し、むしろ 20 個の売れ残りを出した社員を高く評価するにはどのような観点があるかを考えさせる問題となっていた。

グラフを見てみると、500 個の弁当は閉店 1 時間前に売り切れており、品切れによって機会損失が生じていることが読み取れる。仕入れ過ぎによる廃棄ロスよりも、仕入れ不足により買えなかった客に不満を持たれ、購買意欲を長期的に奪いかねない機会損失の方が経営への影響が懸念されるため、機会損失を起こさなかった社員の方を高く評価するという観点を与えられた条件に基づいて導き出せるかが合否の鍵を握っていた。

このようなテキストを場面の中での的確に読み取る力と、設問中の条件に応じて表現する力が求められる問題は、架空の市の「景観保護ガイドライン」を題材にして複数の文章を読み設問に答えさせる「大学入学共通テスト（仮称）」記述式問題のモデル問題例 1 と同じ出題意図を有したものである（注 2）。

「大学入学共通テスト（仮称）」が導入される 2020 年度が間近に迫り対応が急務となっている中で、開成の出題は私立中学を牽引する存在としての矜持の現れに他ならない。今回モデルケースが出現したことで、他の私立中学にとってもこのような作問を促す契機となるに相違なく、2019 年度の中学入試では「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する様々な出題がなされることだろう。

勿論、私立中学への進学指導に日々情熱を傾けている学習塾、私立小学校、家庭教師といった指導者層においても、公立中高一貫校入試対策で培った知見も生かしつつ、教科担当の枠を越えて合教科・科目型問題に対応していくことが求められる。大学受験まで見据えた対策が切実なニーズとして寄せられてくる前に、新たな講座や教材の展開によって受験生を適切に導いてもらいたいと願う次第である。

そして何より、これからの中学受験生は従来の文章読解型の受験対策に留まることなく、日頃から「学力の 3 要素」と呼ばれる「(1) 十分な知識・技能、(2) それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、そして (3) これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」（注 3）を涵養していく必要がある。

今回の開成の問題では、廃棄ロスや機会損失といったマーケティングの考え方を自ずと体得している、もしくはグラフのデータから読み解くことができる感性が磨かれているかが見られていた。こうした能力を磨くにはマーケティングの知識を暗記するような座学に基づく学びではどうしても限界があることから、中学受験生にとつ

ては時間の無駄と見なされていたような能動的な学びを経験できる機会への積極的な参加が功を奏すると思われる。学校・学習塾・家庭の閉じられた世界の中で、与えられた教材と向き合い、限られた大人と接するだけの中学受験生では、社会に出て通用しないどころか中学受験にすら太刀打ちできない時代に突入したと言いきだろ。是非、保護者の方々はお子様の人間力を根本から高めていくような多様な学びの機会を提供するよう、大いに心掛けていただければ幸甚である。

昨年、NPO 学校支援協議会との共催で「第 1 回全国小学生グループプレゼンテーション大会」を開催したが、中学受験を間近に控えた 6 年生が生き生きとした様子で仲間達と課題解決に取り組み、真摯に自分たちの考えを第三者の大人達に臆することなく伝えようとする姿を目の当たりにして、有為転変の社会の中で確固とした立ち位置を築いていく真のエリートの在り方が垣間見えた感があった。是非こうした将来を見据えた多様な学びに取り組む小学生が、未来のオリンピック選手や芸術家を目指す子ども達と同じように高く評価される社会になっていく必要があると強く思う次第である。

ここ数年の最大の懸案であった「高大接続システム改革」に向けた道が大きく開かれた 2018 年。過去の成功体験に縛られることなく、時代の潮流を掴もうと新たな一步を踏み出す姿勢が、教育に携わる全ての人に求められる。

注 1： 高大接続システム改革会議「最終報告」、p51-52

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf

注 2： 独立行政法人大学入試センター「大学入学共通テスト（仮称）」記述式問題のモデル問題例、p4-15

<http://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00009385.pdf>

注 3： 高大接続システム改革会議「最終報告」、p3